少子化も妻だけEDも性の文化衰退が原因だった！

最新テクノロジーで いつもの相手と新しい刺激に開眼

作家・コラムニスト 神田 つばき氏

PROFILE

離婚と子宮ガンをきっかけに、女性に生まれたことの愉しみを求めて緊縛写真のモデルとライターに。『東京女子エロ画祭』『大人の性教育勉強会』などのイベント主宰も。女性の健康とWLB推進員（NPO法人女性の健康とメノポーズ協会）、中級シニアライフカウンセラー（一般社団法人シニアライフサポート協会）として性の健康のために活動している。Twitter ID は @tsubakist

SEXの意欲を失った若者たち

日本の少子化は深刻化の一途です。若い人たちにとって「今や子育ては贅沢品」。夫婦フルタイムで働いても将来の学資が不安で、子どもは好きだけど1人でがまんする、という声をよく聞きます。

そもそも現代は「そこまでセックスに意欲を感じない」という若者が増えているのです。これでは子どもは増えません。日本の若い人々がセックスに積極的でなくなっている理由は何なのでしょうか。

戦後から高度経済成長期にかけての雑誌を研究すると、『夫婦生活』（昭和24年～50年頃）から『微笑』（昭和46年～平成8年）まで、性生活をテーマにしたものが人気を博していたことがわかります。一般の婦人雑誌にさえ性をテーマにした記事が多くあり、「初夜の迎え方」や「いろいろな体位」などが載っていました。

雑誌がとり上げる性生活の主体は夫婦でした。当時はまだ「不倫」という概念はなく、また結婚までは純潔を守るべきとされていました。初夜まで我慢するかわりに、夫婦になったら刺激を求めてもいい、という考えだったようです。

今と大きく違っていたのは、性に関する興味や夢をかき立てるような文化の雰囲気があったことです。映画も雑誌も音楽も漫画も、恋愛とセックスを賛美し、若い男女は素敵なパートナーを得ることが幸せのスタートだと思っていました。

雑誌そのものが衰退し、テレビや漫画の性表現にも規制がかかり、AVやエロ本が完全にゾーニングされた今、「セックスは楽しくて幸せな行為」という印象をもてない人は増えています。

結婚したとしても、夫婦で刺激を求めるどころか、いつの間にか相手を性的に見れなくなってしまう、俗にいう「妻だけED」という現象もあり、なかなか深刻です。

いつもの相手と新鮮な感覚を

夫婦の性をエンカレッジする文化が衰退した今、それに代わるものはないのでしょうか。セックスの意欲を刺激する新しいメディアが必要だと痛切に感じます。

性の分野で利用されている最先端のテクノロジーと言えばVRにAIですが、今のところはセルフプレジャーで利用するものと思われています。

しかし、まだVRが普及しはじめの頃、芳賀書店の若社長が、

「VRはカップルで楽しむものですよ」と言うのを聞き、さすがビニ本発祥の地といわれるショップの経営者は進取の気風に富んでいる、と驚きました。夫婦でVRゴーグルを付け、同じセクシーな映像を見ながらセックスすると感じ方が倍増すると言うのです。

その後、試してみた男女何人かに感想を聞きましたが、全員が声を揃えて言ったのが、「触感に集中できて感じやすくなる」ということでした。特に女性からは「気が散らなくていい」という声が多く聞かれました。

また、挿入行為までしなくても、お互いの体に触れながらVRを見ているだけで興奮が倍増するという人も多く、「いつものパートナーとはちがう人としているみたい」という新鮮な刺激があったそうです。

これはバーチャルデートやネトゲデートより一歩進んだ、カップルでのVR使用法だと思います。しかも快楽はバーチャルにとどまらず、肌と肌を接触するので、幸せホルモン、愛情ホルモンと言われるオキシトシンの分泌も促されます。満足度が高く、少子化対策としても期待できるでしょう。

しかしながら日本の一般家庭におけるVR普及率はまだ低く、ましてゴーグルを2台保有している人は少ないのが現状です。最近はVR設備を備えたレジャーホテルも増えてきました。ぜひ、積極的に導入していただき、ふたりで楽しむ新感覚のVRセックスをPRして、日本のカップルの情熱に火をつけてほしいと願っています。